六ツ美に縁りの人びと

徳川家康（１５４２～１６１６）
―――開幕の祖　英傑の将――

晩年の人間家康の姿を示す木像（大樹寺所蔵－1644（正保元）年製作）

征夷大将軍となり江戸に幕府を開いてから１６０３（慶長８）年15代将軍慶喜によって大政奉還が慶応３年になされるまで、ほぼ３００年にわたり幕藩体制の基を築いた徳川家康は１５４２（天文１１）年岡崎城内の坂谷産室で生まれている。

父は松平弘忠、母は刈谷城主水野忠政の娘於大である。幼名を竹千代といった。家康は幼くして母に生別するとともに父とも死別しているが、その間、尾張の織田氏や関東の今川家の人質となり、やがて駿府（静岡）で暮すようになる。

不運な人質の生活ではあったが、母於大の方からの血書の写経や叔母随念院お久の方のやさしい養育、そして駿府に移り住んだ祖母源応尼らの励ましと躾によって人となった。

１５６０（永禄３）年の桶狭間の戦いの後、祖先以来の念願である三河の平定に奔走し、１５６５（永禄８）年遂に三河を平定する。三河一向一揆の試練の後、松平姓を「徳川」と改める。

織田信長との戦いの際、戦いに敗れた家康は、前途を悲観して祖先の菩提所大樹寺で自決しようとするが、その際、住職勢譽上人に「厭離穢土・欣求浄土」と諭され、この教えが家康を再生させ、後に泰平の世を築く要因となった。

波乱に満ちた苦しい一生である。武田氏との抗争・豊臣氏への政略・国替（浜松・江戸）と６つの大戦（姉川・三方原・長篠・小牧長久手・関が原・大阪陣）と５つの大難（戸田康光による変事・三河一向一揆の苦闘・妻築山御前と長子信康の殺害・三方原の敗戦・本能寺変による伊賀越え）等、数々の苦しい体験を活かして苦労人となり「人の将」となった。

家康は聡明な判断力と柔軟な忍耐力・実行力それに鋼鉄のような組織力をもつといわれ、

天下統一と幕藩体制の基礎を築き、ゆるぎない国内統治をなしとげるが、それには家康の器量もさることながら、膝下にあって家康を支えた忠節強固な家臣団のあったことを看過することはできない。

西郷弾正左衛門稠頼（つぎより）（生年不詳～１４７４）
―――岡崎城を築いた守護目代―――

碧海原野を一望し、矢作川・菅生川が天然の要害となっている竜頭山に岡崎城を築いた西郷弾正左衛門稠頼は三河の守護仁木右京大夫義長の守護目代として大草（幸田）を本拠としていた。

南正面からの岡崎城

時に岩津の松平親氏の南下を防ぐために大草を出た稠頼は、菅生の地を選定し、塁を築いた。１４５２（享徳元）年に着任し、１４５５（康正元）年に竣工したといわれる。

由緒縁起によれば、城完成の日、竜神が出現して「我を守護神として祀らば、永くこの地を守護すべし」と伝えた奇瑞にちなみ、「竜城」と名付けたという。また東面と北面の深い濠を「清海堀」というが、稠頼が入道して「清海」と号したことにちなんだものであるという。この青海入道の名前については「稠頼」「稠副」「頼嗣」などと諸説があるが、西郷氏の菩提寺である大草の正楽寺の青海入道の位牌の表に「蜜乗院殿釋青海」とあり、裏面には「西郷弾正左衛門稠頼、文明六甲午年（１４７４）２月１５日」とある。青海入道は正しくは稠頼であろう。

西郷稠頼画像

稠頼の子、頼嗣は松平家三代信光の子、紀伊守光重を婿養子としたがこれに岡崎城を譲った。

家康が生まれたのは１５２４（天文１１）年である。幼くして母於大と生き別れをし、６歳から１９歳までを織田・今川両家の人質として苦難の道を歩むが、その家康が城に入ったのが１５６０（永禄３）年５月の桶狭間の戦いの以後のことである。

本田重次（１５３０～１５９５）
―――豪勇の三河武士鬼作左―――

１９３０（享禄３）年、宮地町に生まれる。幼名を八蔵又は作左衛門と称した。

７歳の時より、松平弘忠に仕えているが、後に徳川家康に仕えるようになった。1558（永禄元）年、家康の初陣寺部城攻めにより家康に従い先鋒をつとめている。

一向一揆１５６３年にあたっては上和田の砦を攻撃し多くの首級をあげる。その勲功に

より、額田郡名栗郷を知行地として与えられるが、家康の三河平定後最初の奉行職として高力清長、天野影康らとともに役職についている。当時の奉行職は軍務より民政奉公行としての性格が強かったものである。従って重次は戦国の武将でありながら民政家としての手腕ももっていたとみられる。この頃世評として「仏高力・鬼作左どちへんなしの天野三郎兵門」と謡われている。

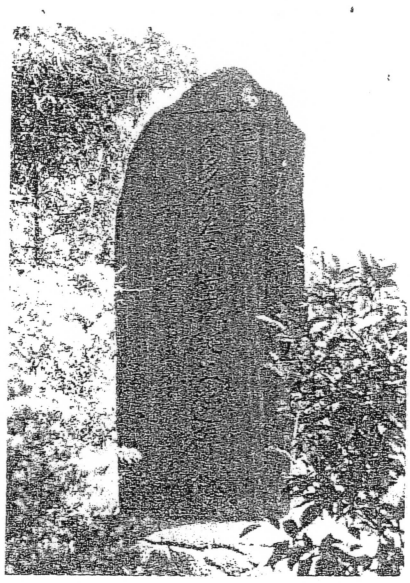
一方、彼の戦いぶりも勇猛であった。その典型的なものとしては１５７２（元亀３）年三方が原の戦いでは、武田信玄の騎馬隊によって総くずれとなり、身に数か所の傷を受けながらも、主君家康が死にものぐるいで退却するのを追い、敵を倒し騎馬の１頭を奪い城について家康の命を救ったことがある。また高天神の戦いでは敵の首級を１８も奪っている。長篠の戦い、蟹江城攻略でも戦功を挙げている。

このことから人は彼を「鬼作左」とか「鬼殿」と呼ぶようになった。剛毅であり激しい気性をもっていたが、反面主君を想う心の優しさをもっていた。家康の背に悪性の腫れ物ができ、灸を勧める囲りの忠言を家康が拒んだとき、遺書をしたため家康を諌めたという。

主君を想い、誰にはばかることなく生きた作左衛門であったが、晩年は恵まれなかった。秀吉の小田原攻めの際「秀吉を迎えるように」という命にそむき「この戦国の世に城をあけることは主君のためにならない」と拒み、天下人の秀吉を迎えもせず、会うことすらしなかった。このことが秀吉の怒りにふれた。家康はやむなく重次を上総国古井戸へ退去させ、後年、下総国相馬郡井野に移した。

重次は家康に一言の不平も言わずそれに従い、その後世を忍んで静かに暮らしたという。１５９６（慶長元）年７月６日、重次は徳川の安泰を念じながら井野で没した。行年６８歳。法名を浄運と称する。

重次が陣中より家族にあてた手紙「一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな馬肥やせ」は有名



本多重次誕生の碑（宮地町）

大久保忠敬（１５６０～１６３９）
―――「三河物語」を著した彦左衛門―――

彦左衛門は大久保忠員（ただかづ）の８男で、１５６０（永禄）年、現在の上和田町に生まれる。

家康・秀忠・家光の３代の将軍に仕え、常に主君を想い、生涯を木綿の衣服で通したという清貧・剛気の三河武士である。１６歳の時、近習として家康に仕え、翌１５７６（天正４）年には兄忠世に従って乾城攻めに参戦している。

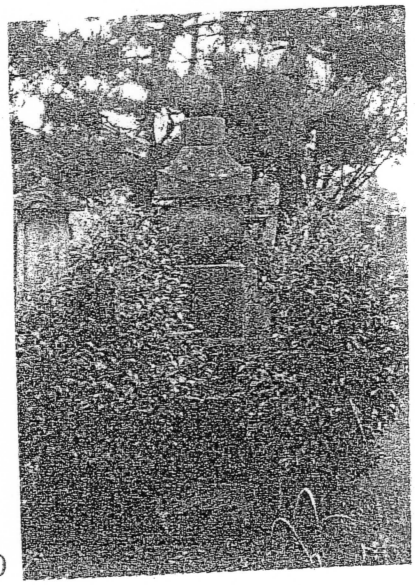
その後、高天神の戦い、上和田の戦い、上田城の戦いなどに参戦し数々の殊勲を立てているが、特に高天神の戦いでは敵の守将を倒すという勲功を立て、家康から直々の感状を得ている。著しい戦功にもかかわらず、終始、忠世の配下におかれていた。理由は彦左衛門が正妻の子でなかったからであろうか。忠世の死後、忠世の子忠隣（ただちか）に仕えたがその忠隣は本多正信との不和によって所領を没収されている。そのため彦左衛門も知行を失ったが、家康によって駿府に召され、額田郡内（幸田町）において１０００石を与えられている。

やがて大阪冬・夏の陣となるが、彦左衛門は槍奉行として奮戦し、勲功によって旗奉行にとりたてられている。しかし大阪の陣後、世は太平となり彦左衛門の活躍の場は次第になくなっていった。

関ヶ原の戦いの以後、新参の武将たちが、民政的手腕のもとに高い役職に就くのをみた彦左衛門は三河譜代の大名として誇りをもち著書によって天下に大久保一族の勲功を顕示しようとした。

１６２６（寛永３）年、４ヶ年の歳月を費やした「三河物語」は完成をみた。この書物は門外不出の書として子孫に対する教訓や大久保一族の由緒を記録する形式をとっているが、一族の喧伝といった面が強い。いたるところに一族が代々の主君に対し忠節を全うしたかをくりかえし述べている。「三河物語」には彦左衛門自身、気骨・律気な三河武士として描かれている。

その顕著な例は大阪夏の陣後における「御旗崩れ吟味の場面」である。この「三河物語」は今なお歴史書として高く評価されているが、それは、今川氏の属国となった頃の松平家の忍従する姿が生き生きと描きだされているからであろう。



大久保忠教の墓碑（長福寺）

後になり、彦左衛門が臨終の際将軍家光が使いを送り 5000 石の加増を伝えたとき、「死に臨んでの加増は子孫をぜいたくにするだけ」と辞退したといわれる。

１９３９（寛永１６）年８８歳で天寿を全うする。菩提寺は竜泉寺町長福寺である。

板倉勝重（１５４５～１６２４）
―――最初の京都所司代―――

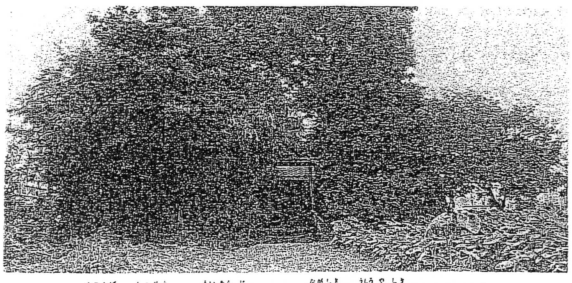
１５４５（天文１４）年額田郡小美にて出生。幼少より出家して香誉宗哲と称し、碧海郡中島村の永安寺に住居した。

父好重戦死後、弟の定重が家督を相続するが、その定重が高天神の戦いで戦死したため、家康の命で還俗してして家を継ぎ甚平と称した。

天正１４年、駿府に移り、駿府町奉行を勤めた。天正１８年８月関東移封後は関東代官・小田原奉行・江戸町奉行となる。１６０１（慶長６）年に京都町奉行に就任、同年９月 28 日に京都所司代に就き、従五位下伊賀守に叙任されている。

多事多難の京都所司代在任は１９年もの長きにわたったが、対禁裏関係のほかにも駅馬人夫の法制化にも関係した。また、有名な方広寺鐘銘事件では所司代として幕府方につき大活躍をした。幕府からも朝廷側からも厚い信任を得て名所司代といわれた。

１６２０（元和６）年、高齢を理由として辞任し、堀川の邸で隠居に似た余生を送る。１６２４（寛永元）年４月、８０歳で病死。法名を傑山源英長円寺と号し、中島永安寺（長円寺）を葬地とした。やがて、世子重宗によって寺跡が碧海郡中島から幡豆郡貝吹（現西尾市貝吹町）に移され、長円寺と称されるようになった。



勝重が修行した永安寺のあと（中島町後屋敷・1992.8）

長円寺本堂正面

宇都宮泰藤（１３０２～１３５２）
―――糟目犬頭神社の由緒―

糟目神社は「延喜式」巻９・１０に記載されている碧海郡６座の式内社の一つとされている。

○　鎮　座　　宮地町字馬場３１

○　祭　神　　彦火火出見尊　　伊弊諾尊

　　素盞嗚尊　　犬頭霊神

○　由　緒

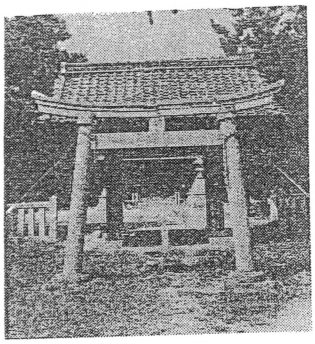
社伝によると三河大久保氏の始祖とする、上和田城主泰藤（１３０２～１３５２）は貞和２年５月当社において鷹狩する。

社殿の坤の方に７囲余の大杉樹あり。泰藤樹下に憩い仮寝す。樹上に巨蛇あり、首を垂れ泰藤を呑まんとする。率いる白犬頻りに吠え警す。泰藤驚き覚む。然れどもまた眠り、犬また吠ゆ。再三にわたるに及び泰藤怒り差添えの刀を抜き犬頭を断つ。頭忽ち飛騰し蛇の喉を噛み之を殺す。泰藤驚きかつ感じ、かつ悔いその犬をもって犬頭霊神社とし合祀する。

近世、犬頭社として公称しており徳川家康から４３石の社領を与えられ、１６０３（慶長８）年には朱印状を拝領している。

また岡崎藩主本多康重は当社を保護し、本殿を再建。１６０２（慶長７）年に本殿を再建するとともに鳥居大小２か所、狗犬１対（市文化財）を寄進している。

式内糟目神社と称すのは１８世紀後半であるらしく寛政５年の拝殿造立棟札には「式内糟目神社犬頭大明神」とある。明治５年郷社に指定される・



犬頭神社の鳥居

犬頭神社の狛犬

野本新十郎・渡辺弥蔵（ともに生没年不詳）
―――占部用水の開削者―――

占部川は岡崎市天白町において矢作川を水源とし、平野を貫流して広田川に至る灌漑のの一大用水路である。

下流の岡崎市国正町・中村町・定国町・正名町は占部４郷と呼ばれ８６６（貞観８）年三河権守となった占部日良磨呂によって開墾された。開墾によって耕地は多くなったが、用水路がないため降雨が長く続くと水害に悩み、晴天が続けば干害に苦しむという状態で、農民は安心して作物の耕作に励むことができない状況であった。

この農民の窮状を救ったのが正名の住人野本新十郎と中村の住人渡辺弥蔵である。ともに武門の出である。野本新十郎の遠祖は占部日良磨呂であり、弥蔵の遠祖は桓武天皇の第２皇子といわれている。

１５９８（慶長３）年二人は意を決して開削を領主に願い出た。水源の位置を福島新田に定めそこから水路の延長が８Km余りになる占部の地まで導水しようとするのである。

開発の計画から開削の工事に着手すると、農民から反対の声が続出した。

１．用水路の開発には多くの費用と手間がかかり農民の負担が増大する。

２．用水路の堤防が決壊して水害の恐れがある。

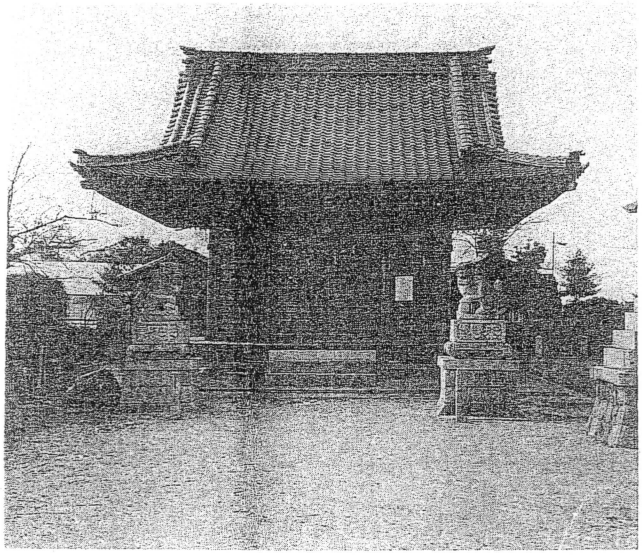
３．多くの部分の土地がつぶれ、先祖伝来の土地がなかなる

というのである。しかし二人はひるまなかった。開削の初志は変わらず東奔西走して工事にあたった。寝食を忘れ工事に励み、出費が重なると自分らの屋敷・田畑・山林などを全部売り払った。

１６０３（慶長8）年、５年の歳月を費やしてやっと完成をみた。しかし、子孫もなく家族も離散し、家名も断絶という憂目をみている。幕府は二人の功績を認め占部用水に関する「占部郷以外の村が用水を必要とする場合は１ヶ村につき５００文を渡すこと」「くいが必要な時は代官が準備すること」のお墨付きを与えている。

現在、占部川神社には二人が用水の守護神として祭られるとともに石碑もある。また近くの永応寺では毎年春先に二人の威徳をしのぶ水恩が営まれている。

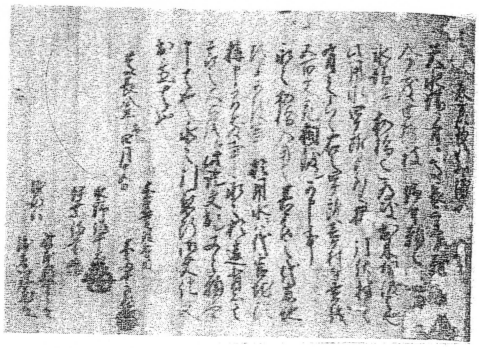
国正町地内、県道岡崎碧南線に架かる橋に「思案橋」というのがあるが、それは農民から反対され思案にくれた二人の気持ちを察して、完成後だれいうとなくそう呼んだというのである。



正名町の占部川神社

用水の使用をゆるす書状

この用水は、占部４か村が使えるものとする。なお、この村以外の村が水を使いたい時は、ひとつの村につきお金500文を4か村にわたすこと
慶長８年４月15日



鶴田勝蔵（１８４３～１９０６）
―――農業の発展に尽力した功労者―――

晩年の鶴田勝蔵

１８４３（天保１４）年１０月碧海郡中島村で生を受ける。資性温厚篤実にして文久元年９月、村人の信頼のもとに１８歳で庄屋になる。

以後村政に従事すること４０有余年、自費を投して藍の栽培、蚕業の発達を図り、窮民救済に努める。

中島村及び安藤川沿村の額田・碧海・幡豆・３郡１０ヶ村反別９２５町歩は、悪水氾濫して収穫が減少していた。勝蔵はその改修をしようとして郡村を遊説して異議を調停し、水利組合を結んで工を起し、遂に３４年２月に竣工をする。以後、水害の害なし。

一方、勝蔵は水田を二毛作とし収穫を増加しようとし東奔西走し

熱心に勧説する。その労が報われ、悪水排除の水路を新設する。その反別は１４７町７反歩、工費２４，０１１円余りに及ぶ。また、明治２２年堤防の事に関して矢作川東西の沿村の幡豆郡・碧海郡の両村が反目して大いに紛糾するが、勝蔵は仲裁の労をとり、平穏に解決する。さらに２６年８月の矢作川洪水に際しては、幡豆・碧海の両郡にわたり一大紛擾を生ずるが右往左説して解決につとめ、平和のうちに事を治める。

明治３９年３月、藍授褒章を賜わるが、公事に尽した功績により賞を受けること前後 80 回に及ぶ。

１９０６（明治４３）年６８歳にして卒す。

早川龍介（１８５３～１９３３）
―――大嘗祭に献穀・供納の国会議員―――

衆議院議員、岡崎市名誉市民

政界や地方自治に活躍した早川龍介

１８５３（寛永６）年８月碧海郡中島村で祖父以来、旗本小笠原伊勢守所領の代官を務めた早川家の長男として生まれた。

９歳の時、父に死別した後、１４歳で代官見習いとなった。１６歳の時に明治維新となり静岡大学校に入学する。

明治４年帰郷し、翌５年額田郡第２大区３小区戸長となる。地租改正に尽力し９年には愛知県１４等出仕となる。

１３年県会議員に当選し、４期を務め、副議長・郡部会副議長などを歴任した。明治１８年農商業視察員としてアメリカに渡った龍介は帰国後、アメリカで痛感した耕地整理の実現に尽力する。

それとともに、明治５年に愛知県に統合された額田県の再地運動に力を入れた。２２年３月「三河旬報」を発刊。請願・建白運動を展開後、２３年第１回衆議院選挙に第８区より立候補し当選している。

以来、１９２０（大正９）年の第１４回総選挙までに１０回当選している。代議士に終止符を打った後、政友会・憲政会・同志会・民政党に属し、第４回内国勧業博覧会委員・大正博覧会・平和記念事業博覧会審査官や水難救済会評議員・愛知県農工銀行委員などの要職を歴任した。

１９１５（大正４）年大正天皇の即位に伴う大嘗祭で悠紀斎田が六ッ美村大字中島地内に決められた際、全国的知名度から村長に推され、献穀供納の大任を果たした。翌５年勲４等瑞宝章を受ける。

漢詩・和歌・俳句・絵画・など多趣味で悠斎・衣水・華舟等と号した。

１９３３（昭和８）年死去、享年８１歳

金山政五郎（１８５４～１９３１）
―――医学塾「愛生舎」舎主―――

医師。明治・大正期に野畑村で医学塾「愛生舎」を開設し、多くの医師を育成した。

遠祖は１９５３（文禄２）年、朝鮮より帰化した医者清庵が長崎で開業し、清鉄・清達と続く。清達の子、野畑金山家初代道悦は寛永２年長崎で出生後、医学研究のため諸国を歴訪するが、途次、慶安元年野畑村に移り、懇望されて開業する。

金山政五郎は１８５４（安政元）年江戸で生まれる。明治維新で職を失い明治１０年金山家を相続し医師となる。

自宅に医学塾愛生舎（後に愛生会館）を開設し、医者を志望する者を教育し明治３０年頃までに３０余人の医者を送り出した。明治中期には鷲塚の洋洋医館と並んで、西三河開業医の双璧として栄え、分院を額田郡細川村・明大寺村・高力村にも開設した。

詩歌・謡曲・囲碁等を趣味とし、晩年には仏教に帰依し、写経に明け暮れたという。

１９３１（昭和６）年６月、７８歳で没する。

石川成章（１８７２～１９４５）
―――地質学の権威―――

明治から昭和前期にかけての地質学者で僧籍出身。

遺影を迎えた石川成章

１８７２（明治５）年６月２１日、碧海郡中島村（現岡崎市中島町）の浄光寺で、石川嶺観を父として生まれる。

明治２９年、浄土真宗三河教校出身者として始めて東京帝国大学に入り、地質学を修める。３２年７月卒業。この期を皮切りに、東京真宗中学校の講師をはじめ、東京高等師範学校・陸軍中央幼年学校・早稲田大学・東都帝国大学などの講師を続けた。そのかたわら、旧制中学校の教科書を中心な多くの著書を残した。

主なものとして

・鉱物界	・地文学講義
・鉱物界教授指針	・宇宙の黙示
・地文地質学要解	・自然の妙趣
・地球発達史	・自然科学と宗教

など多数がある。

職務上、東京・京都での生活が中心であったが、晩年は郷里の浄光寺に帰り、真宗大谷派参事となっている。

１９４５（昭和２０）年９月、７３歳で没する。

太田功平（１８９３～１９３０）
―――六ッ美の菜種博士―――

菜種の新品種「六ッ美種」の開発者。１８９３（明治２６）年、碧海郡中井村（現在の岡崎市土井町）に生まれる。

愛知第二師範学校卒業後、棚尾・依佐美・冨士松・桜井等の訓導として教鞭ををとる。

高松宮殿下の視察を受けた時の功平

１９２７（昭和２）年、六ッ美村立農業補修学校の長谷川一男校長の招きで教頭となり同校に勤務するようになる。当時、菜種は米・麦の裏作として栽培されていたが、生産性が低く主な収入源としてはなりえなかった。

功平は菜種の改良――種子選定・育苗・肥料・移植などの研究に同僚の榊原菊松（安城市城ヶ入町）、本田桂（幸田町）らと取り組んだ。内外の菜種栽培の文献を整理研究し、試験栽培を生徒や農家に依頼し、データを克明に集積していくという方法であった。また功平自らは農家に出かけて細かな指導をしたり、栽培についての研究発表をしたりパンフレットを配布したりもした。

こうした努力に触発され六ッ美の菜種の収穫量は飛躍的に高まり、有利な換金作物として農民の間に浸透していった。大阪の製油会社の資金援助もあったが、功平はいままでの成果を「雲臺（うんだい）調査」としてまとめ出版した。この書物の内容は非常に優れたものであり、県知事より農業の教科書として認可されたほどである。

また、このころ六ッ美種（早生・中生・晩生）という新品種の開発に成功。反当り収穫量を３倍にも高めることができた。「実収４石、菜種栽培法」の出版や全国各地にわたる菜種栽培法の講演などによって六ッ美の名は全国にとどろいた。「六ッ美の菜種か、菜種の六ッ美か」といわれ、高松宮殿下、牧野内大臣などの農業視察となったほどである。

短い生涯であった。前途を嘱望された功平であったが１９３０（昭和５）年１２月４日、交通事故にあい死去した。３７歳である。

野々山卯三郎（１８６６～１９２９）
―――占部から六ッ美村へと時代・事相を移した野々山卯三郎―――

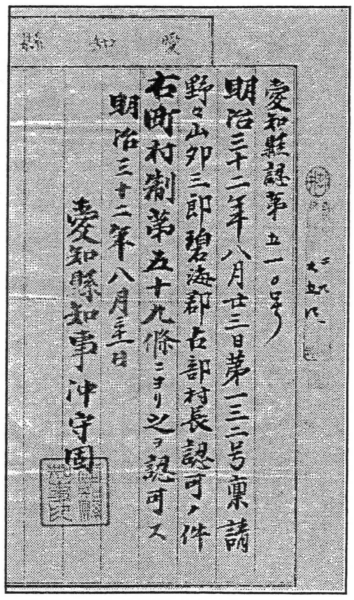
悠紀斎田等に関し、農業発展の先駆者として鶴田勝蔵。大嘗祭献穀の功労者として早川龍介翁の名を挙げた。そして時代は過ぎて六ッ美の雲臺として全国に名を広めたのに太田功平があることは既に述べた。これら先人の業績とはやや異なるが、時代と世の移ろいにあずかったのに野々山卯三郎がある。

１８８９（明治２２）年、占部村で出生した卯三郎は正名村や定国村、中村、国正村、坂左右村、下和田村、野畑村、など７か村が合してなった占部村で若くして役職を歴任した。

占部の土地地区整理委員、占部学校仮校舎修繕委員、学校・役場新築委員、占部村村会議員、収入役そして助役を務め、1899（明治３２）年には３２歳の若さで占部村長に就任している。その後１９０６（明治３９）年、六ッ美村が誕生するまで占部村長を務めている。

その間、碧海郡長の指示で静岡県を訪れたり、安藤川悪水組合委員として安藤川の改修にも尽力している。また郡内においては、県会評議員、衛生会評議員、教育会評議員を務めるなど郡内での要職も歴任している。

六ッ美村が誕生してからは、村会議員（４０歳）、碧海郡会議員（４１歳）となり勲七等青色桐葉章を受けている。その後、碧海郡会副議長（４３歳）も務め村・郡会議員を続けつつ、六ッ美村学務委員（４５歳）、村農会評議員、そしてその副会長にもなっている。


愛知縣認第五一〇号
明治三十二年八月十三日第一三三号稟請
野々山卯三郎碧海郡占部村長認可ノ件
右町村制第五十九條ニヨリ之ヲ認可ス
明治三十二年八月三十日
愛知縣知事 沖守固

愛知県知事からの村長の認可

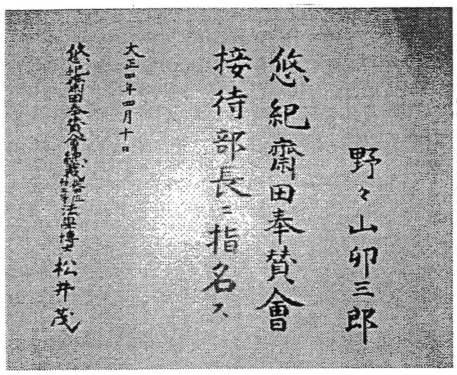
大正４年発行の「碧海郡名士人録」には、卯三郎の記録が「徹頭徹尾、温和と実行を大切にし、農事に熱心であった」と述べられている。この温和と実行からは人々から信頼されていたことがうかがわれるし、「農事に熱心」の記述からは、占部村から六ッ美村へと変遷する中で、卯三郎が占部村長や六ッ美村・碧海郡会議員を務めつつ、耕地整理の視察や農会評議員・安藤川の改修などの農業にかかわる業績を指して述べていたとも考える。当時の産業の第一次は農業であった。その農業は村内の産業の最重要視された課題であり、その課題の振興について他から認められた業績を卯三郎は果していたものと評価される。

●総裁　松井　茂（愛知県知事）
●会長　井深　基（碧海郡長）
前列左から4人目
●顧問・庶務部長　早川龍介
（衆議院議員・村長）前列右から3人目
●顧問　近藤又左衛門
（碧海郡会議長）　前列右から4人目
●式典部長　高木傳八（村農会長）
中列左から2人目
●警備部長　山本幾太郎
（在郷軍人分会長）中列左から1人目
●接待部長　野々山卯三郎
（斎田委員長）　前列左から3人目
●会計部長　角岡興吉
（碧海郡役所書記）前列左から2人目
※後列左から1人目が
本校初代校長　村井猪作

悠紀斎田奉賛会役員

１９１５（大正４）年、６月５日、お田植まつりが挙行される。前後して祓式（大正４年４月２０日）、播種式（４月２３日）、大祓式（９月１９日）、抜穂式（９月２０日）、供納（１０月１５日）と伝統の祭事・神事が陸続するが、中島が悠紀斎田に勅定された頃から大嘗祭悠紀斎田委員会が発足している（大正３年３月）。その際の委員長が卯三郎である。

大嘗祭悠紀斎田委員会はやがて悠記斎田奉賛会として発展解消するが（大正４年４月）、その節卯三郎は愛知県知事から「接待部長」を任命されお田植まつりの一連の活動を企画運営している。



京都御所での供納米の献上の列

卯三郎らの粒粒辛苦の供納米はやがて献上のために京都御所を訪れるようになるが、その献上の列にも、奉賛会解散式（大正４年１２月１１日）にも参列し、終始、悠紀斎田とその歩みを共にしたと言える。

おわりに

「十年一昔」という言葉がある。世紀という語句を使わないとしたら、１００年をどのように言い回したらよいだろうか。

大正天皇の即位に係わり悠紀斎田が誕生してから１００年を経過しようとしている。いわば大河の流れにも似る奔流にも「瀬」や「淀み」がある。明治・大正・昭和・平成と時世を数える中で、日本にもわが郷土にも実に多くを経験した。

悠紀斎田に限っても

- ○　大嘗祭と天皇の即位
- ○　勅定と斎田の点定
- ○　斎田地の造成と準備
- ○　お田植まつりと奉仕
- ○　悠紀斎田８０周年と主基斎田との提携
- ○　その他のお田植式と周囲の変貌

「去る者は日々に疎し」とかいう。ともすれば風化し忘れ去られようとする悠紀斎田の歴史と皇室の伝統と文化を消してはならないという意図からこの小誌を認めた。

しかし筆力の不足や描写の稚拙さもあって、時々の情景を充分に描き出せなかったことを遺憾に思う。それにもかかわらず監修と情報・記録の提供に最大の努力を惜しまれなかった先輩の厚意を感謝して筆を措きたい。

平成２５年３月１０日

監修　柵木　猛
野々山克彦
加藤　正男
杉浦　勝英

文責　谷川　巌

参考文献

- ○　旧岡崎市史
- ○　岡崎市史
- ○　六ッ美村史
- ○　岡崎市制７０周年記念事業記録誌
- ○　岡崎・額田の１００年
- ○　岡崎いまむかし
- ○　六ッ美南部の歴史・文化を紐解く
- ○　岡崎の歴史
- ○　岡崎の人物史
- ○　悠紀の里
- ○　日本史図録
- ○　最新歴史資料